視　点

子ども，保護者の目線からの子育て支援

小　田　　慈

Ⅰ．はじめに

つい先日，悲惨なニュースが報道された。ミルクを買うお金がなく，双子で生まれた赤ちゃんの一人を餓死させてしまった事件である。若い母親は殺人罪で逮捕された。マスコミ報道で知る限りでは，背景にあるさまざまな状況は十分にはわからない。この母親にはさらに児童養護施設に保護中の幼い二人の子どもがいるという。日本という国で，乳児が餓死するという事態が起きている。この若い母親を非難するのは容易であろう。このような事件が報道されるたびに人々の関心は“犯人捜し”に移ってしまう。確かに一人ひとりの女性がもつ，母親としての資質，言葉を換えれば母性の問題はあるかもしれない。それでも，周囲の人々，公的機関，医療施設等は個々で，あるいは連携して何かできることがあったのではないかと深く考えさせられてしまう。若い母親をここまで追い込んでしまったことを母親個人の問題だけとしてとらえてしまうことは決して許されることではない。このことは父親が当事者となった場合も同様である。わが国における“子育て”に対する社会の“attitude”が試されているように思えてならない。

古来，日本の文化における子育ては“村全体でみんなが協力して子どもたちを育てていく”，“子どもたちは村の財産であり，大切な財産をみんなで守っていく”という思想に基づいていたと思われる。こうしていかないと村を守っていけない，村人の数を維持していけないという切実な時代的背景があったのも事実であろう。このことは，今も地域の行事として語り継がれている村祭りの形態を見てみれば理解できる。村祭りの前半は神事的であり，後半はある意味，種の保存のための行動が祭りとして表現されていることが理解できる。結果的に，子どもたちは“村人，みんなが協力して育てるもの”という感覚が自然に生まれてくるのであろう。

20世紀に入り，特に第２次世界大戦後，わが国の社会文化は明治維新に匹敵するほどの変貌を，欧米，特に米国の影響を受けながら遂げていく。21世紀になると若い世代を中心に，従来とは逆に欧米に影響を与えるような社会文化も生まれるようになってきた。

この社会文化・風潮の変貌の中で従来とは異なった子ども，子育てに関する問題が起こり，そのことに関するさまざまな対応や政策がとられ，地域共生社会という語も国の指針に含まれる今日この頃である。本稿では，筆者なりに日頃感じている子どもに関する諸問題，子育て支援の在り方について述べる。

Ⅱ．誰のための保育施設か

“日本，死ね！”という言葉がマスコミに大きく取り上げられ，待機児童解消のための保育施設の量と質の拡充が，各自治体の大きな課題となっている。働きたくても，子どもを通園させる施設がないために，やむなく勤務をしていない女性，この女性たちが勤務に就けないための経済損失が１兆３千億円と新聞報道がなされたことがある。そして，次に出てくる言葉は“働く女性のために保育施設を増やせ，待機児童を０に”

Parenting Support：From the Guardian and Children's Perspectives
Megumi Oda
岡山大学名誉教授

Presented by Medical*Online

である。これは，本当に子どもたちや，子育て中の保護者のことを考えての対応であろうか？誰のことを考えてのことか？と問いたくなる。保護者が就業していない場合，子どもを保育施設に入園させることは極めてハードルが高い。制度的にもそうであるし，風潮として，“働いてもいないのに，子どもを保育園に預けて・・，子育ては親がするものでしょ！”といった感情的なものもあるであろう。

本誌の読者の中には，お孫さんをもたれている方も多いはずである。子育て真っ盛りの方もおられるであろう。育児休暇中の方もおられるかもしれない。数日でもお孫さんの世話を経験された方々は，きっと現代の子育ての大変さを実感されるはずである。お孫さんの年齢にもよるが2歳頃になると“毎日が運動会”状態である。どんなに可愛い孫でも，言うことを聞いてくれないこと（これは幼い子どもでは，当たり前のことである）が重なると思わず手をあげたくなる瞬間があるかもしれない。せめて30分でも新聞を読みたい，コーヒーをゆっくり飲みたい，パソコンの前に座りたいという気持ちも湧いてくるに違いない。お孫さんが複数になれば，さまざまなことがさらに増幅されていく。

若い子育て中の夫婦はこのような毎日を送っている。たまには，夫婦二人でゆっくりと食事をしたい，気分転換に外出したいという思いが湧いてくるのは当然であろう。さらに識者と称する人たちの，“今どきの若い親は子どもをほったらかして，テレビに子育てさせている，自分はスマホに夢中になって・・，だから発達障害が増える”などという発言が追い打ちをかける。このような発言をされる識者の方々が子育てをされたのは，数十年前のことである。スマホやパソコンはなく，家の周りには遊園地や自然の遊び場があり，年齢の違う子どもたちが一緒に遊び，幼稚園や小学校は園庭や校庭を開放していた時代である。家に帰ればおじいちゃんやおばあちゃん，さらにはおじちゃんやおばちゃんが傍にいた家庭が多かった時代である。中には，当時の社会状況や子育ての概念から，子育ては家にいる母親の仕事と決めつけ，仕事ばかりして実際に自分の子どものおむつを替えたり，着替えさせたり離乳食を食べさせたりした経験のない方もおられるかもしれない。

今の時代はどうであろうか。大人の勝手で，“よい子は静かに遊びましょう”といったとんでもない看板が行政によって子どもたちが元気に遊ぶところであるはずの公園に立てられ，園庭や校庭からは放課後は締め出されてしまう（近年は放課後の学童保育も行われるようになってきたが，就学前の子どもたちには当てはまらない）。“よい子”という言葉が“大人にとって都合のよい子”のように聞こえてしまう。保育施設に通えない子どもたちは，どこで何をして毎日を過ごしているのであろうか。保育施設は，ある意味，子どもたちの生活の場といってもよい。生活の場が与えられていない子どもたちは，決して広いとはいえない都会のアパートやマンションで大人たちの中で過ごしているのであろうか。

“専業主婦が携わる家事も大切な仕事である。専業主婦の仕事を報酬に換算すると・・”といったことが話題になった時代もあった。現代では就業していなくても，以前とは全く異なった社会環境の中で家事と子育ての両立に多くの若い母親たちが奮闘している。就業したくてもできないといったほうが適切かもしれない。特に都市周辺では経済的な問題も加わり負担は増強する。例えば，仕事の都合でお互いの実家を離れて東京で暮らす若い夫婦が幼い二人の子どもを育てるとする。住居費，医療費，保育施設を利用する費用，そして地域共生という感覚が薄れていく中での日々の生活・・・，ため息が出てくるのは当然であろう。現代の社会事情に見合った，郷愁ではない，事実に基づいた子育て支援策を識者と称する人たちは具体的に提示すべきであり，行政は規則，規則といったこだわりを捨てて提示された支援策を実行すべきである。もっといえば，政治家や行政に頼らず，地域で，民間で，できることから取り組んでいく時期に来ているのではないだろうか。

Ⅲ．“働く女性のための保育施設”という固定概念からの脱却を

母親（父親）が就業していようが，専業主婦（主夫）であろうが，子どもたちが健康で明るく，そして生き生きとした笑顔を見せるのは子どもたち同士で自由に遊んでいる時間である。大切なことは，そういう時間と場所があることである。保育施設に通園している子どもたちは，そういう場所に恵まれている。通園できない子どもたちはフェンスに遮られて立ち入ることは難しく，大人の中で一人遊びをする時間が増えてくる。“親が保育施設に子どもを預けることなく，がんばっ

Presented by Medical*Online

て自分の手で子育てをしている”という美辞麗句の影で，子どもたちの目を通してみれば，これはとても理不尽なことではないだろうか。言葉がうまくしゃべれたら“なんで僕は，あんな楽しそうな遊具があるところでお友だちと一緒に遊べないの？ママがお仕事していないから？”と保護者に尋ねるのではなかろうか。父親（母親）が朝早く出勤した後，母親（父親）が一人で子どもたちと過ごし，世話をすることになる。幼い子どもたちは，活発である。次々と興味が変わっていく。識者と称する人たちはテレビに子守をさせるなという。でも朝の忙しいとき，録画しておいた子ども向け番組でも見てくれていないと，朝食の準備も，トイレにすら行けなくなってしまう。子どもたちが起きている間中，家事は何もできなくなってしまう。友人や地域とのつながりのために，いまやスマホ，パソコンは必須アイテムになっている。操作する時間すら奪われてしまったら，あせりや不安に苛まれることになってしまうこともあり得る。もちろん程度の問題はあるが，ふっとした休憩のひと時が必要なことは，どなたでも理解できるであろう。思わず幼い子どもにあたってしまうこともあるかもしれない。

保育施設の利用の仕方はさまざまあると思われる。認可保育所は国の児童福祉法に基づく基準を満たして都道府県知事より認可を受けた保育施設であるが，入園するにあたっては保護者の就労状況などさまざまな条件が課せられている。認可外保育所は，都道府県知事の認可を受けていない保育施設であり，各施設独自の判断で定員や開所時間，料金などが設定できる。“認可外”という語のため，negative な印象を受けてしまう場合もあるが，基準や規則に縛られることなく，入園に関する規制もなく，より自由な運用が可能になっている。経済的な面も含めていずれの保育施設にも長所・短所があるが，いずれを選択するにしても，特に認可保育所においては入園して毎日登園するということが基本になっている。今後，社会の要請により保育施設は数を増やし，質の向上も図られるであろう。

しかし“毎日通園する保育所”が，すべての若い子育て世代の家庭で望まれているのであろうか？仕事をもたず子育てに専念する，そうしている若い保護者も多い。また，週５日ではなく，週２～３日あるいは週１日でもいい，子育てをしながら自分のキャリアを続けていきたい保護者もたくさんいるであろう。子育てに専念する母親（父親）でも，少し疲れて“１日でもいい，自分のしたいことをしたい，息抜きをしたい”と思う瞬間は必ずあるはずである。“たまには，久しぶりに夫婦二人で，デートしたい”と思うのは当たり前のことであろう。昔のように“子育て中の親が子どもをほっておいてデートなんて！”というのは年寄りのおせっかい以外の何物でもない。

このように考えを進めていくと，今，子育て真っ最中で仕事はしていない，あるいは仕事はしているがパート程度という若い保護者の目線から求められ必要とされている子育て支援は，“毎日ではない，でも必要なときに安心して，愛するわが子に子どもらしい生活の場を提供できる環境”，すなわち現実的には一時保育施設の充実ということではなかろうか。一生懸命子育てをしている母親や父親に，突然の家族の疾病，事故，どうしても断れない行事，仕事が降りかかってくることはいつでも起こり得る。すでに述べたように，どんなに子育てに頑張っている若い母親や父親でも，ふっと“疲れた”，“せめて１日でも子どもから解放されてゆっくり休みたい，好きなことをしたい”，“夫婦でゆっくりと食事がしたい”という気持ちは襲ってくる。ガス抜きも必要となる。母親や父親が忙しさのためにあるいは精神的に余裕を失ったとき，子どもたちは一人ぼっちになり一人遊びをして時を過ごし，子どもとしての生活の場を失うことになる。

このようなときに求められるのは，すべての乳幼児がいつでも利用可能な充実した一時保育施設であり，地域における子育て支援システムであろう。米国のように Baby sitter の社会文化はなく，地域共生というわが国古来の社会感覚も薄れている現代において，“働く女性のために保育施設”という発想は“子どもたちのための保育施設”という発想に転換すべきと考える。女性が働いていようがいまいが，いつでも必要なときには利用できる保育施設の充実が今求められているのではなかろうか。大きな社会問題となっている児童虐待も，子育てが少し苦手な保護者に育児疲れのガス抜きの機会を与えることで，悲劇を未然に防ぐ可能性が高まるのではなかろうか。

Ⅳ．おわりに

保育施設について“働く女性のために”という考え方から“子どもたちのために”という発想の転換の必要性を中心に筆者の意見を述べた。字数の関係から，病児保育については触れなかったが，子育て支援の中

Presented by Medical*Online

で，十分に対応がなされていないものの一つに病児保育がある。現在の病児保育はいってみれば，病後児保育が中心になっているのではなかろうか。子育て中の働く母親や父親目線で考えたとき，一番の問題は，Day 0，すなわち，“朝は元気で登園しました。でも保育施設から発熱したから迎えに来るように，そして病院で診てもらってください”と言われた，その当日である。翌日からは仕事場でスケジュールの変更なども頼みやすい。しかし当日は，かなり気を使わねばならない。理想を言えば，子どもの突然の病気を理由に途中退社することが気兼ねなく行え，会社も，そのような事態が起きても業務に支障がないような人員配置をしておくということであろうが，まだまだ実現には時間がかかりそうである。子どもが病気のときはちゃんと傍にいるのが当然と，識者と称する人々は言う。しかし，そうしたくてもできない現実がある。病児保育サポーターの育成に力を入れている自治体や医師会，民間団体も多くなり，今後 Day 0 への対応システムの構築が期待される。

いずれにしても，地域共生という理念の下で，全国一律ではなく，各地域に適した，子どもたち，そして保護者の目線からの子育て支援が求められている。

Presented by Medical*Online